



- Next page -

微睡の午後 窓際はWetに揺れて

逸れた呼吸が 重なる時

言葉巧みに委ねれば

縫れながら踊るように

手繰りながら失うように

静寂の中 ただ 深く青い海が欲しい

その狂気は 僕自身のカケラ

弾ける気泡で露わになれ

あの感覚も この感動も

偶然じゃないから

来る日も またくる日も

触れたくて 溺れたくて もどかしいよ

ねじられても 塞がれても

キミじゃなきゃダメなのに

キミといるとダメになる

熱しやすく冷めやすい 水中を駆け巡る不連続と

キミの虚言に クラクラするよ

どこにも属さない 値しない

光と影が交差する 障害を隔てたガラクタのスペース

解らないのなら 早く解き明かして

その先が見えないグレイな視線

ただ ただ 未来は激しくて

ただ ただ 雨は冷たくて

キモチは形にならないまま

不意なkissで逃がしてる

僕らは 季節に向かう為

急ぎすぎてしまったけど

この空虚に命を吹き込まれたのなら

僕らは 別のカタチの愛を知るだろう

それは決して満ち足りたものでもないけれど

僕はそれを信じて疑わない

擦り切れたハーモニー

Next page、きっと 聞こえる

耳を澄ませば

まだ少し あどけなさを残して . . .